

戦記文学の悲劇

——『戦艦大和の最期』論——

星野光徳

『戦艦大和の最期』は、〈幻の巨艦〉の最後の出撃とその劇的な最期を死生の狭間に体験した作者・吉田満の、個体的体験の激甚さをスリットとして戦争世界というスクリーンの上に繰り展げられた人間存在の虚無、と言い表わし得る一つの戦記である。しかし、それがみずからの体験をでき得る限り正確に再現しようという記録意識の上に成立しているという点では、疑いなく一つの記録作品といえるのだが、かつての戦争世界に内在した一つの巨大なドラマを、終戦の時点で再現し、殆んどかつての戦争状況内意識で定着させようとすると、何らかの作品化意識もまた同時に作用しており、作品としての自立性を獲得しているという点では、決して単なる「戦争記録」ではない。吉田満はプロの作家ではなく、文学という形を通じて戦争の全体を暴き出すことをみずからに課した人間ではないが、そうでないがゆえに却って、私たちは彼の記録の中に、戦争の〈事実〉を見ることができる。

昭和十八年十二月、学徒出陣で東大在学中海軍に入営、翌年

末少尉となり、「大和」副電測士としてその壮絶な戦艦の最期を目撃した吉田満は、当時二十二歳でしかなかった。燃料片道搭載指令の特攻出撃は、「大和」乗組の士官たちにすでにその敗北を予期させていたというが、昭和二十年四月の末期的戦争状況の中で（米軍の沖繩上陸は「大和」出港の二日前）沖繩への必死の特攻出撃という任務が、若い士官たちにはその責任と誇りと使命感によつて、却つて或る意味でのヒロイックな絶対性を帯びて感じられていたとしても不思議はない。

「大和」の出撃作戦がいかに〈無暴愚劣〉なものであったにせよ、その出撃の時点での吉田少尉は、少なくとも、任務に忠実であろうと考えていたに違いないのだ。状況に対してみずから参加していこうとする熱意が、その熱意を裏切られた後の〈記録〉にとつて、重要な基礎となるのは当然のことである。事実、吉田は、何びとも抗えない戦争の運命（少なくとも若い吉田にとつてはそうであつた筈の）の中で、殆んど絶望的な沖繩決戦に立ち向かおうとする世界最大の戦艦の悲劇を、その搭乗員で

あるということ、厳肅なる事態としてむしろ充実した緊張で実感していたことは確かだろう。そして、その事実、その吉田の戦争状況内志向と、ときにそれと相反しながら吉田の中に共存した、出撃後のごく限られた読書の為に「スビノザガ伝記」を携え来るような学徒出身士官らしい真摯さ——それはまた「君国ノタメニ散ルソレハ分カル」ダガ一体ソレハ、ドウイウコトトツナガッテイルノダ。俺ノ死、俺ノ生命、マタ日本全体ノ敗北ソレヲ更ニ一般的な、普遍的な、何カ価値トイウ様ナモノニ結び付ケタイノダ」という学徒出身士官の反問、「君国ノタメニ散ルソレハ分ル」ようなレベルでの不幸な真摯さに通ずるのだが——それら戦争状況内意識を動かし難い前提として、のちに「戦艦大和の最期」が書かれるのである。

昭和二十年四月二日早朝、「大和」艦内スピーカーが突如、出港準備を告げるところから、恰も日記ふうはこの作品は始まる。

サレバ出撃カ

我ラ如何ニコノ時ヲ期シテ待チシカ

我ラ国家ノ干城トシテ大イナル荣誉ヲ与エラレタリ イツ

ノ日カ、ソノ証ヲ立テザルベカラズ

我ヲ前線ノ将士トシテ過分ノ衣食ヲ賜ワリタリ イツノ日

カ ソノ知遇ニ報イザルベカラズ

出撃コソソノ好機ナリ

それ自体が痛ましい、しかし戦争状況内にあつてはむしろ当然の、この吉田の決して消極的ではない戦争状況への参加の熱意に、先づ着目しておきたい。それが強いられたものであつた

にせよ、戦争をみずから生きようとする青春にとつて、死を強いられる無念さとは別に、痛ましくも、戦争そのものへの批判、国家そのものへの懐疑などは入り得べき余地がすでになかつた、というのが事実である。だが、それがこの作品成立の前提たる時代性としての戦争状況であり、青年吉田にこの作品を記させずにはおかなかつた体験の、精神的起点としての戦争状況というものであつた。

「空軍掩護機ノ皆無」(海上兵力ノ劣勢) (発進時期ノ遅延) といった悪条件下での愚劣悲惨な作戦に動員される「大和」乗組員たちの間に、前述したようなそれなりの緊張した充実とは別に(勿論、たとえあの末期的状況下においても、彼らが必敗のみを思っていたなどというのは嘘だが)、敗北への覚悟があつたことも確かだ。或いは、すでに予想される敗北への覚悟の中であつたからこそ、戦争状況に捉われた精神が一つの自足としてあり得たというべきだろうか。勿論それは、あの末期的戦争状況の中で、強要され、訓練された充実であり、吉田は疑いもなく近づきつつある死を思わなかつた訳ではない。ただし、戦争状況内的な、縛られた定式において。

ワレ未熟ナリトノ自覚ト、必勝ノ信念トノ相剋ヲ如何ニセ

ン

必勝ノ信念トハ、ソモソモ何ゾヤ

惑ウナカレ 得難キ試験ナルベシ タダ突入ノ機ニ全能ヲ

發揮センノミ

沖繩喪失ハスナワチ本土決戦ナリ 現役兵力ヲモツテ本土

決戦ヲ呼号スルモ成算全クナシ

我ヲヲ待ツモノ　タダ必敗ノミカ　胸中火ノゴトキモノア
リ　本作戦ノ使命、ソノ重責ヤ如何ニ

微かな、しかし打ち消し難い動揺は、はつきりとした形をとれないまま、全力を尽くして任務に忠実であろうとする意識ばかりが鼓舞されなければならぬような状況（或いは倫理）が、吉田を包んでいた。若く無力な一士官にできたことといえば、死をいかに回避するかではなく、いかに死を見つめるか、いかに死を肯定するかということではしかなかったかも知れない。

若々しい緊張を支える、《ミズカラヲ偽レル》ことなく、目前の事態と《死》を直視しようとする吉田の真摯さは、また悲慘にも、《国家ノ干城トシテ》《ソノ証ヲ立テ》ようとすると戦争状況内志向と同位でしかない。だが、あの戦争の中の日本人を問う者にとっては、それこそが問題なのだ。そこに窺われる《覚悟》の構造こそ、吉田の立っていた（立たされていた）尖端的戦争状況の在りようと、この戦記文学を醸成させた戦争世界の、青春にとっての一つのかたちを示している。若い吉田少尉における国家意識の構造の問題は措くとしても、彼に或る確かな戦争への使命感というべきものを見るのは容易だ。もともと戦争状況というものは、人々の国家的一体感を抜きにしたところには成立し得ぬものであり、すでに制空権を失った沖繩への、一機の掩護機も持たない「大和」の無謀な出撃は、そのような無条件の国家意識に裏打ちされた使命感によって辛くも支えられたものと考えざるを得ない。吉田は戦後になって、次のように書いた。

私は模範的な兵でも優秀な士官でもなかったが、かといっ

て特に怠惰でもなかった。戦争というものの意味を疑い軍隊生活を嫌悪しながら、与えられた境遇には負けまいとがんばる、ほぼ平均並みの学徒兵だった——略——平和な日が一日も早くくることを切望する気持と、戦争稼業にたいする忠実さとが、私の中に両立しえたのだ。（「一兵士の責任」）戦争の意味を疑いながら、軍隊生活に甘んじ、戦争稼業に専念するという、あの状況下では止むを得ないかに見える姿勢が、実はあの戦争を遂行したのだということを私たちはいま考えねばならぬが、また吉田が次のように述べずにはいられないところに、戦争体験者の二重の悲劇性を見ることができろ。

我々にとって、戦陣の生活、出陣の体験は、この世の限りのものだったのである。若者が、最後の人生に何とか生甲斐を見出そうと苦しみ、そこに何ものかを肯定しようとかあがくことこそ、むしろ自然ではなからうか。（昭27・7 創元社版あとがき）

生命の燃焼は、たとえそれが強いられたものであっても、いや強いられたものであればある程、かけがえのない真実に貫かれている。（昭40・10 東都書房版まえがき）
だが、吉田の特殊体験は、確かに、戦争状況全体の悲劇性とはむしろ離れて、それ自体の完結性、自立性を作品として充分に主張する。

すでに出港のときから、その動静を敵側に探知されていた「大和」以下第二艦隊は、七日午前十二時三十二分、へ九州最南端ノ陸岸ステニ艦尾方向ニ消へてからおよそ三、四時間後、

敵機大編隊により、当初危惧された通りの空からの集中攻撃を受け、吉田にとつては「初陣」の、そして「大和」にとつては最後の、極めて悲劇的な戦鬪の火蓋を切る。

「高角砲二十四門、機銃百五十門、一瞬砲火ヲ開」き、だが、その巨体を隠すべくもない「大和」は、恰好の攻撃目標として、延べ約一千に及ぶ敵機の投雷、投弾、機銃掃射に遇つて、実に二時間足らずの極めて不利な反撃のうちに無残なる沈没を遂げてしまふのである。が、そのわずか二時間の戦鬪のうちに、吉田は何を見たか。吉田にとつての戦鬪の実相というものが、吉田の戦争体験の核が、その二時間のうちに凝縮されてあつたといえる。

敵側の第一波襲撃による、後部電探室被弾の報を受け（そこは吉田の配置であつたが、そのときまたまた彼は持ち場を交代していた）、弾雨をくぐつて吉田はその場へ急ぐ。へワレニ任務アリ、イナ、ワレニ代ワリテ戦友アマタ相果テシナリ

一切ヲ吹き掃ワレタルカト見レバ、朽チシ壁ノ腰ニ叩キツケラレタル肉塊、一抱エ大ノ紅キ肉樽アリ、四肢、首ナドノ突出物ヲモガレタル胴体ナラン

アタリニ弾カレタル四箇ヲ認メ、抱エ来テワガ前ニ置ク焦ゲタル爛肉ニ、点々軍装ノ破布ヲシキ「カーキ」色ノモノ付着ス 脂臭粉々

ソコニ首、手足ガ付ケ根ノ位置ヲ確カメ得ザルハ言ウモ更ナリ

四箇ノ死屍ノ間ニ、何ラノ判別ヲ定メ難キトハ
コレヲ抱ケバ芯焼ケテナオ熱ク、コレヲ撫ズレバ手触リ粗

木ノ肌ノ如シ

数分前マデココニ活躍シタル戦友、部下ノ肉体トコノ肉塊ト、同体ニシテタダ時ヲ隔テタルニ過ギズトハ
如何ニシテ信ジ得ベキ

ココニ宿リシ四個ノ生命、四様ノ個性ハ今イズコ

他ノ八名ハ全ク飛散シテ屍臭スラ漂ワズ何タル空漠カ

今ノ瞬時マテマサニ現前セル実在ハ、如何ナル帰趨ヲ遂ゲシ

疑イ訝シミテ止マズ 不審ニ堪エズ

悲憤ニ非ズ 恐怖ニ非ズ タダ不審ニ堪エズ

惨澹たる状況があまりに歴然と事実であるゆえに、その状況があまりに惨絶に過ぎて、ただ呆然とする以外にはないような戦争世界であり、吉田の文体は、確かにその惨絶を十分に伝えている。彼がこの、ただ一度の実戦において直面しなければならなかつたものは、しかし、状況の惨絶さそれ自体では勿論ない。息つくことさえ許されない激しい被弾の中で吉田が見たのは、いまそこに戦う僚友の姿がいますでに飛散して亡いという、屍体すら残さない存在の消滅の異常さ、へ容赦なく、有無をいわず気まぐれに、誰彼となくとびかかゝる「へ死」の凄じさ、それゆえに却つて「へ死」を越える何かではなかつたか。

弾雨の中を報告に走る吉田の前に、ついさつき吉田を激励してくれた僚友の姿はない。

サキノ機銃砲塔、高田少尉ノ配置片影ナシノ（略）ノ深く
挟ラレシトコロ、タダ濛々タル白煙逆巻クノミノ人、銃、

塔、一瞬ニシテ根コソギ奪ワレタルカノ（略）ワガ通過ノ

数十秒早カリセバ、直撃弾ノ爆風ワレヲ包ミ、見事君ト同
体ニ散華シタルモノヲ

（日本ハ進歩トイウコトヲ輕シジ過ギタ——敗レテ目覚メル、
ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレルカ——俺タチハソノ先導ニ
ナルノタ日本ノ新生ニサキガケテ散ル マサニ本望ジヤナイカ）
という持論で青年士官たちからの信頼を集めた白淵大尉。〈命
中率ノ低下ハ殆ンド射撃能力ノ低下、訓練ノ不足ニヨル〉とい
う砲術学校からの戦訓に、〈コノ大馬鹿野郎〉〈不足ナルハ訓練
ニ非ズシテ、科学研究ノ熱意ト能力ナリ〉と書いた彼も、吉田
の目前でかき消える。

左正面ヨリ百数十機、驟雨ノ去来セル如シノ直撃弾多数、
煙突付近ニ命中ノ白淵大尉、直撃弾ニ斃ル 智勇兼備ノ若
武者、一片ノ肉、一滴ノ血ヲ残サズ

束の間のうち続く〈死〉また〈死〉。今まで生活を共にして
きた者の、一瞬にしての消滅。信じ難い〈死〉の連続の中を、
吉田はただ偶然だけによって生き延びる。

一瞬、前後オヨビ左ノ三方ヨリ重圧落チカカルノ（略）ノ
前後ノ兵トモニヌギ捨テタル服ノ如シ 即死ノ左方ノ西田
少尉、見レバ唐突ニ起キ上がり、左膝ヲ折り唇ステニ色ヲ
失ウノ（略）ノ

西田少尉、兵二名、コレヲ三箇ノ肉体ハ、荒レ狂ウ弾片ヨ
リワレヲ遮リ、救イタリソノ隔リ、尺ニモ満タズ

「大和」の傾斜〈三十五度〉、わずか二時間の、敵編隊機によ
る殆んど完璧な反復攻撃によって滅びゆく「大和」。しかし、
吉田の〈感性ハヒトリ、イワレナキ昂リニ燃エ立〉ち、未だ「大

和」の転覆を実感できない。〈オオソ巨大ナルモノノ魔力ハ、
ソコニ属スル者ノ心魂ヲ奪イ、絶対ノ信頼ト愛着ヲ植エ付ク〉。
だが、確実に転覆しつつある不沈艦「大和」。確実に崩壊して
いく「大和」幻想。夥しい上官、僚友の死。生命の偶然と人間
存在のあまりのあつげなき。底知れぬ〈虚無〉。

すべて左舷に集中される魚雷と艦上への直撃弾による致命
傷で、もはや転覆まで数分でしかない「大和」艦内で無意識の
うちに〈自決用ロープ〉に手をかける吉田は、すでに確実に
〈死〉の中にあつたといふべきだろうか。むしろ沈没間際にな
つて、崩壊する「大和」幻想は吉田に対してその運命共同の実
体感を濃密にしつつ、吉田を〈死〉の中に追いやったとさえい
えはしないか。

しかし、脱出命令。「大和」の傾斜八十度、〈今ニシテ脱出セ
ントハ、何ノタメノ特攻出撃ゾヤ 何ノタメノ「自決用ロープ」
ゾヤ〉略——総員死ニ方用意。我ラガ待チ設ケタルモノ、タダ
コレノミニ非ズヤ。脱出を躊躇した吉田は殆んど最後、「大和」
轟沈の寸前に海上に逃れ、湧き上がる水圧、巨大な渦流に〈手
足モガレンバカリ〉に〈吹キ上ゲラレ、投ゲ出サレ、叩キノメ
サ〉れながら、「大和」が〈一大閃光ヲ噴キ、火ノ巨柱〉とな
つて全艦ごとく破砕するその最期を自撃する。

第一回の誘爆によって海中深く引き回されたのち浮上した吉
田を、落下する夥しい赤熱の火箭から守つたのは、いち早く浮
上したため弾片を免れ得なかつた戦友たちの屍であつた。更に
第二回の誘爆に、飛び散る弾片と巨大な煙突の吸引力による渦
流に呑み込まれる数多い死から吉田を守つたのは、脱出を躊躇

し、艦橋付近にいたという偶然であった。

相次ぐ自爆ニ飛ビ散ル無数ノ弾片——我ラ艦体ノ陰ニアリ

シ少数ノ者ヲ除キ、スベテ身ヲサナガラ弾巢トナセルカ

(略)

ワレ五歩右ニアラバ危ウカラ

火柱逆落トシニ吹き落チ、赤熱ノ鉄片、木塊、冲天ニ飛散

シ轟々落下ス

吉田は拉致された海中で渦巻かれながら、へ鼻トイワズ、口トイワズ、噴きこむ海水に意識を奪われ、窒息死の寸前、誘爆による逆流によつて水面に浮上する。

誘爆五秒オソクトモ呼吸極限ヲ超エ、敢エテナカリジナリへカク重畳セル僥倖、ソノ一ヲ欠クトモ、再ビ陽ヲ見ルコトアラザリシニ、それでも生きて還つた吉田は、だが確かに、或る「死」を体験したのだ。

ここまで読みすすむとき、ここに記されているものが単に凄愴奇烈な戦闘の状況だけではないことは確かである。吉田をしてこの記録の作品を必然たらしめたものは、単に状況の酸鼻に対する驚愕や恐怖ではあるまい。むしろ吉田の筆致は、その惨烈無比の戦争世界への軽々しい驚嘆を拒否している。(確かに吉田は、「大和」の最期と夥しい人間の死を、軽薄な嘆声から隔絶する為、この文体を無意識のうちにも用いたと思われる点がある。吉田自身がのちに言うように、復員した「大和」乗組員の体験談を人々が単純な驚きで聞くのを「空々しく」感じたといい彼に、この執筆に当たつてそのような思いが作用しなかつた筈はない)では、ここに記されているものは何か。吉田

自身はのちに「戦争というものの本当の悲惨さの実感」として、次のように書いている。

われわれの特攻作戦に参加した方に近い将兵に限つても、一人一人何十年かずつの人生をここまで引きずつてきたあげく、一つの戦闘という虚無のルツボの中で、いさゝかたかたのように消えさるほかなかつた。——略——あらゆる煩惱、あらゆる未練にさいなまれた無数の人間の間に、それとはまるで無縁のような無頓着さをもつて、徹底した破壊力が横行するのが戦争なのである。(「一兵士の責任」 傍点星野)

そして更に「戦中派にとつて、戦争体験の第一の命題は、自分自身の生命と戦争とが、必然的に密着しているという事実である」(「散華の世代」と書く吉田が、その内部世界の中心から拭えずにいるものは、すでに明らかである。吉田が見たもの、そして吉田がここに記そうとしたものは、あの戦争世界が現出させた人間存在そのものの問題を含む、彼の戦争体験意識がそこから逃れられない、膨大な「虚無」であり、そのことを見てしまったということが吉田にとつての戦争体験に殆んど他ならないところの、生命の偶然と人間存在の「虚無」への激しい慄きに他ならない。私たちは、この戦記の中にひとつの厳然たる完結した世界を見、その世界を無限に反問する作者の声を聞いて、感動する。確かに、この悲惨な、しかし堅固に完結した世界と、作者の慄きこそが、この記録の作品を単なる記録ではない次元にまで引き上げる。勿論、事実の記録の正確さそれ自体が読む者のこころを打つのではないし、状況の激越さに拮抗す

るのではないことは言うまでもない。

だが、あの戦争の自己にとつての意味を問うべきこの作品が、
こういうかたちで結晶したということに対して、私はもう一步
踏み込んで考えずにはいられない。この作品に流れているのが、
決して戦後の反省や批判ではなく、どうしても戦争状況内の自
己にこだわらずにはいられない体験者の痛ましさをそのも
のであるからこそ、私たちは、私たちとしてこの作品から、よ
り別の問題を引き出さねばならないと思われるのだ。

かつて終戦直後、この作品がへ作者の思想的、政治的立場に
疑問があるとして米国の日本占領政策により全文抹殺の処分
を受けたのち、初めてへ本来の形で公にされへた創元社版（昭
27・8）の「あとがき」に、吉田は執筆の動機を次のように述
べた。

執筆の動機は、敗戦という空白によつて社会生活の出發
点を奪われた私自身の、反省と潛心のために、戦争のもた
らしたもつとも生ま生ましい体験を、ありのままに刻みつ
けてみることにあつた。私は戦場に参ずることを強いられ
たものである。しかも戦争は、学生であつた私の生活の全
面を破壊し、終戦の廢墟の中に私を取り残していった。――
しかし、私は今立ち直らなければならぬ。新しく生きは
じめねばならない。単なる愚痴も悔恨も無用である。――
その第一歩として、まづ手初めとして、自分の偽らぬ姿を
みつめてみよう、いかに戦つてきたかの跡を、自分自身に
照らしてみよう、――こうした気持で、筆の走るままに書

き上げたのである。

ここには、へ約三年前、ある特殊な事情のために、きわめて
不本意な形で世に出ることを余儀なくされたへこの作品（昭24・
8銀座出版社版「軍艦大和」のことか）が被つた、へ戦争肯定
の文学であり、軍国精神鼓吹の小説であるとの批判へに対する
弁明とともに、かつての状況内での自分を見つめてみようとい
う、それ自体過去の体験の深みに囚われた、みずからへの内発
的な問いかけが、深刻な表情で語られている。しかし、その深
刻さは、かつてのへ偽らぬ姿をみつめへるといふ動機が、自己
の体験の意味を切開しようとする意志であるよりも、状況後に
まで持続して焼きついてしまった戦争状況内意識に囚われたも
のであることは殆んど否定できない。執筆の動機は、占領軍の
統制や終戦後の状況内での喧しい戦争非難とは殆んど関わりな
く――体験が烈しければ烈しいほど、その意味の問い返しはた
だ自分一人の中に閉ざされてしまふものなのだろうか――彼
の体験は、再現時点での対象化など受けつけないほどに、彼の
肉体そのものに焼きついてしまつてゐるのだ。実際、この作品
には、学徒出陣、「大和」への乗組み、特攻出撃とその敗北、
その後の終戦までの海辺特攻基地での勤務、終戦の虚脱、とい
つた曲折の影さへ反映してはいない。私たちが見るのは、状況
後から状況を眺める眼ではなく、終戦による戦争状況内意識の
曲折すらない、状況そのものの時点での熱意と、「大和」の最
期をめぐる夥しいへ死へへの慄きではなかつたか。昭和二十七
年の「あとがき」にはつきりと意識された、かつての自分のへ偽
らぬ姿をみつめへようとする意識は、実は、終戦の翌月、へ文

字が迷るように流れ出てこの作品の初稿が書かれた時点では、ただ空前の体験の事実を刻みつけようとするかつての状況内意識を出るものではなかったのである。この作品執筆へと吉田を衝き動かしたものは、確かに、かつての自分の「偽らぬ姿をみつめ」ようと意識させる、体験への固執であるが、その体験固執へと彼を衝き動かしているのは、すでに見たような人間存在の虚無への慄きを核とする、吉田にとつての戦争（戦闘）体験そのものの或る絶対性といえるものに他ならない。復員した吉田が吉川英治に懇懇されて執筆した初稿に「文字が迷るように流れ出た」ことの理由として、彼は「第一に、その経験の心象が、あまりに強烈であった」、**「第二に——たえずその一連の経過を想起させられてきて——そこに投影した限りの映像が、克明に積み重ねられていた」**、**「第三に、それを文字に表出する機が熟していた」**ことをあげ、その実感の後に「へまず戦争にまつわる自分のものいっさいを、非情にあばいてみる」こと、その中にこそ新生のいとぐちは見出される」という確認に到つたことを述べている。体験者の中には、体験の意味をみずから確認する以前に、体験の「強烈」さに囚われている自己があるのだ。だがしかし、ここにこそ考えなければならぬ問題があるといわねばならない。一体、本当にあの戦争とは、この作品に描かれたような殆んど美的に厳肅な世界だったのだろうか。また、どうして吉田は、戦争を「強いられた」としながら、その体験を自分から突き放して対象化し得ず、国家と戦争そのものに対する批判（或いは恨み）の視点を作品に持ち込めなかつたのか。人はそれを、未だ戦争状況から脱け出せなかつたからだと言う

かも知れぬが、それは一体どういふことなのか。

だが、前者の問いは何も、この作品を支える美的な緊張を、例えば安岡章太郎の「遁走」に描かれた兵隊の絶望的な猥雑さと比較するからではない。が、吉田の体験の烈しさと、この作品として書かれた張り詰めた戦争の世界とを直線的に結んで考えることは、却つて吉田の体験を非体験者には理解し得ない絶対だとして、ヴェールに包み込むことになりかねない。何故なら、吉田の文体は、戦争状況内での体験の烈しさと、その再現と記録という表現の時点での増幅とによって二重に支えられているのだ。この緊張した文体は、前述したように、戦争状況から解き放たれない彼のこころを表わすと同時に、執筆時点での異常なまでのその昂まりを証しているではないか。執筆までに増幅されたかつての状況内意識（の昂まり）が、描写することそれ自体において、「大和」沈没をめぐる心理を幾分か彩つたとは、当然考えられるのである。例えば、「大和」沈没の間際「総員上甲板」が叫ばれる時点での艦の傾斜は、「児島襲の戦史『戦艦大和』によれば「三十度近く」であるが、吉田は「八十度」と書いている。読者は、この作品にありありと見える作者の昂ぶり（それはそのまま、この作品を内側から支えるものであり、その切実さこそが、この作品を単なる記録から飛躍させるものであるが）を、作者の戦争状況内での熱意と、体験した事象の強烈さにおいてばかりでなく、持続された彼の戦争状況内意識の、作品執筆時点での変形の問題においても考えねばなるまい。吉田が体験を一つの記録として文字で表現する際に、他ならぬその戦争状況内意識（の痛ましい構造）は、かつての

軍隊内公的表現をごく自然に用いたように、体験反芻の避けられぬ反作用として、かつての戦争世界の或る絶対性（或いは幻想性）をまるで唯一の戦争世界であるかのように、まさに完結した絶対性として増幅させたのだ。体験・認識・表現というそれぞれの過程を同一平面上に収斂させて考えるのは、或る体験の作品化を考える場合に、私たちが陥り易い観念的誤謬である。この作品の虚構性といえざるものも、この、体験の自己増幅と関わっている。人間存在の「虚無」への底知れぬ慄きを核とする、吉田の体験へのこだわりは、もちろん決して戦後の状況の中でつくられたものではないが、この戦記が吉田個人の体験（その痛ましさをも含めて）とその確認をスリットとしていることによって、執筆時点での体験意識の増幅は、事実を書こうとするとき必然的に、そしてまた痛ましくも、かつての状況を典型化し虚構化したといえるのではないだろうか。

吉田は恐らく、かつての状況に没頭していた自己を再現することで、自分がその中に没頭し「ヘソノ生涯ヲ賭ケテ果タシ」そうとしたものが何であったのか、体験の意味を深く問わずにはいられなかったであろうが、しかし体験に囚われた彼のこだわりの構造ゆえに、その昂ぶりは図らずも、熱意そして「虚無」という、戦争状況の一面ばかりを強調したのだ。私はむしろ、このことに関して、戦後の吉田が、ではなぜ自分は「へがんばったのか、何のために自分は戦ったのか」という問いに対して下したであろう答えを聞きたいと思う。そのような問いは、あの戦争状況を思うとき或いは無意味なのかも知れぬが、現在の私たちは、どうしてもこの「なぜ」を問わない訳にはいかない。

確かに私たち読者は、この作品に写された戦争世界の名状し難い「熱さ」と、状況の凄惨の背後にある人間存在の測り知れぬ「虚無」を見てとることに、この作品の重さにこころがふるえる。しかし、私たちのその感動自体、体験者・吉田が決してその体験から解き放たれず自分からも体験を突き放すことができないでいるように、膨大な「虚無」への慄きに裏打ちされた、しかし出口のない、そして結局は「ワレ戦エリ 戦エリ——濁リナキ回想」などという実戦者の熱意そのものの肯定へと解消されがちな、体験への絶対視という危険に晒されてはいないだろうか。そうなのだ。それを「強いられ」たとする体験者意識は、被害者的色調を帯びることで、却ってその体験から解き放たれないとしても、私たちは、戦争体験というものの意味を解く以前に体験そのものの重さに囚われてはならない。私たちがこの作品に見るべきは、閉塞された戦争状況をしかし精一杯戦ったなどという戦闘譚ではない。むしろ注意が払われねばならないのは、彼の記した戦争体験の背後に匂う、日本人的な、精一杯であることへの自足そのものがもつ問題である。あの、絶対的な強制の中に呑み込まれていた、すなわち、精一杯であることであの状況の中で自足していた体験者は、事実、みずから体験を突き放すことができない。いわば吉田の個的体験への固執が記録した、彼みずからとつての戦争（戦闘）の事実は、その記録のダイナミズムに支えられて吉田個人を越え、断片的戦闘体験を越えはした。だが、体験者自身は、彼個人を越えてしまった体験の意味に更に深く囚われざるを得なかったのである。遂には「へ生命と戦争とが密着している」などと書かざる

を得ないほど、出口のない体験の世界、そのものに囚われてしまったのである。

すでに言うまでもないが、かつての体験の深みに囚われてしまった吉田のころのふるえは、また、このカタカナの文語日記体という文体自体がそのまま示してもいたではないか。実際、この作品の中に私たちが先づ感じるのは、この簡潔な文体がむしろ厳肅な格調を帯び、徹底して非日常的なその世界を語ろうとする作者の緊張が、（それは極めて悲惨ではあるが）読者のころにも、或るかたちで伝わってくるということであつたらう。私たちがこの作品に戦時下の或る厳肅なる興奮を感じることができるところが少なくない。この緊張した文語体自体に負うところが少なくない。このカタカナ文語体の採用の理由について、吉田が「第一は、死生の体験の重みと余情とが、日常語に乗り難く、第二は、戦争をその唯中に入つて描こうとする場合、『戦い』というものの持つリズムが、この文体の格調を要求」（昭27創元社版あとがき）したからだと述べ、〈第一行を書き下した時、おのずからすでに——文語体であつた〉（占領下の大和）と述べるのを信じるならば、作者の恣意を越える文体の必然というものは、勿論彼の体験のそれだけの絶対性の証左に他ならないが、これに関して私たちが思い起こすのは、かつての軍隊内の公式文書（とりわけ兵士の軍隊生活を律した典範令）が殆んど総てカタカナ文語体であつたことである。戦争世界のある絶対を、それを支えていた厳肅さのままで再現しようとする吉田の戦争状況内意識にとつて、軍人精神の表現法でもあつたかつての公的文体を用いることが、最

も自然であつて不思議はない。軍隊・戦争とはその意味で、その中にいた人間にとつて一つのリズムであつたとさえいえる。そして、もし、この文体が、軍隊内公式文書の肅然たる響きを戦後にまで引き摺つた実戦者の意識の反映であるとするなら、吉田が体験に囚われてしまったことの根柢はますます限定される。

因みに、私は、原民喜が『夏の花』において、〈この辺の印象は、どうも片仮名で描きなぐる方が応わしいようだ〉として原爆被災の惨状を表現していたのを思い出すし、また、『きけわだつみのこえ』の学徒兵たちが、その運命に対する覚悟を文語体で挿入していたのを思い出す。これら対照的な二つは、やはりどちらも、或る絶対的な体験であつたことに違ひはない。このことは、体験とそれを再現・記録する文体との関係の問題を通じて、私に戦争体験というものの特異性を感じさせずにはいない。吉田の作品においても〈おのずから——文語体であつた〉という文体は、とりも直さず、かつての世界の、吉田の内面における不動性、その他のすべてに対する超越性を物語るもの以外ではない。〈死生の体験の重みと余情とが、日常語に乗り難く〉かつたということも、体験による底深い懐きが従来認識のレベルを突き破るほどのものであつたことを示すが、それ自体、吉田の体験意識が痛ましくも戦争状況内に捕縛されてあることを示してしまふではないか。

繰り返すが、私たちは、吉田が体験した事実自体の烈しさに目を奪われて、その底にあるもの——彼がみずからの戦争体験を無意識のうちにもかつての状況内意識そのままであつての烈

しきそのものにおいて支えようとしたこと、その為に採用した文体そのものが示唆する問題に踏み込むことを忘れてはならない。そこに踏み込まなければ、もともと事実を記録したと作者自身が語る作品について、私たちはその記録の事実性に感動するかしないかという次元を越えることはできないのだ。

私たちは、戦争体験者が自分の青春を覆った戦争を恐らくは深く激しく恨んでいながら、その具体的な体験を自分から突き放せないでいることの痛ましきこそを、いま見つめねばならない。そして、その問題の鍵は、恐らく、彼がみずからの意志ではなく参加した筈の戦争世界に対する、そのかつての痛ましい受けとめ方そのものに含まれていると思われる。つまり、この作品において、吉田が体験してしまつた膨大な悲劇の、彼自身にとつての意味というのは、その写された状況の想像を絶する烈しさにおいてではなく、むしろ、その体験した戦争世界を痛ましくも壮絶な美文で支えさせた、彼が持続せざるを得なかつた戦争状況内意識それ自体の中に、考えられるのである。写された状況よりも、描かれた事実の重さ（幾千の人間の生命によつて購われた空前の虚無）を支えている吉田の意識——状況後からの判断をむしろ拒む、戦争状況内での熱意、壮美、使命感など——こそが、体験者・吉田にとつてのまさに悲劇的な原点ではないのか。体験者が、戦争への参加を（強いられた）と言いながらも、体験を決して自分から突き放せなかつたことの痛ましき、（強いられたものであればある程、かけがえのない真実に貫かれている）などと表明せずにはいられなかつたことの痛ましき構造が、ここに窺われる。すなわち、決して消極

的ではなく参加した世界を（強いられた）ものだとする被害者意識は、勿論不徹底な一片の救いを体験者に与えながら、しかしむしろ、その体験意識が被害者の域を出ようとしないことによつて、却つて体験者は出口のない戦争体験の断片に深く囚われ続けるしかないのだ。体験を（強いられた）ものとし、戦争世界全体の解明へと向かわないならば、では一体、あの状況下での国家への無抵抗な自己の問題はどこへ放擲されてしまうのか。かつて自分も共有した戦争体験の或る絶対さと痛ましきのゆえに、この作品の圧倒的な世界への直截的な共感を禁じ得ない戦中派世代があるなら、それに対して私たちは、彼らが或いは意識しないかも知れぬ、その体験とそれを突き放せないこととの二重の悲劇性を考えない訳にはいかない。

私は、この作品に記録された空前の戦争状況と存在そのものの（虚無）に慄然とするが、若冠二十二歳の学徒出身士官の、国家権力への殆んど盲目的な、戦争状況下での熱意——状況の熱に冒された不幸が、そもそも何によつて支えられていたかを考えると、戦争文学に描かれた戦争という状況自体の烈しさが、読者に対しても或る基本的な観念を要求していることを否定できない。つまり、もしかすると、私たち日本人は、あの戦争の遂行を支えた日本人の戦争状況内意識の構造から、未だに解き放たれてはいないのだ。私たちが、この作品の（確かさ）と言ひ、（厳肅さ）と言ひ、作者の誠実さなどと言つて肯定する、作品としての完結性を担っているのは、他でもない吉田の戦争状況内意識なのであつて、その意識の深い底を流れているのは、（強いられた）戦争であつたが自分は精一杯戦つた、（与えら

れた境遇には負けまいとがんばる）などという、とにかく、精一杯戦うことへの、殆んど無条件の肯定ではないか。もしくは、精一杯やつたということで自己免罪する、本質的には逃避の論理或いは美学である。だが問題は、つねに、なぜ、何を、である。あの戦争の状況の中で、殆んど静視できぬような錯乱を行為したのが、ほんの一步足を踏み外した、そのような日本人の無原則な熱中の美学であったことを思うとき、私たちは、この作品から私たちとして何を讀みとるべきかを思い知らされる。

結局はそれがあの戦争を遂行したとさえない。そのような忠実さ——日本人的な、精一杯であることへの美德觀念が、しかし一方では「強いられた」という被害者意識と相俟って、戦争体験者に、決して自分から突き放すことのできない一種独特な体験意識を醸成させたのである。「強いられ」て参加した戦争を、だが「与えられた境遇には負けまいとがんば」ってしまふような忠実さで受けとめてしまったことが、彼の内部に焼きついた体験の、或る絶対的な構造を補完しているのだ。体験者は、忠実に精一杯戦ってしまつたことによつて、「強いられた」戦争の体験を自分から突き放すことができない。

だが、あの戦争状況という強制の中では、「国家への無批判」ととつて、そのような逃避の美学を認める自己満足以外の何が可能であつたか、と問う人があるかも知れない。恐らく、戦争体験者の多くは、誰でも「死生の体験の重み」を抱え、「強いられた」戦争をそれでも精一杯戦つたことにおいて自己を容認する以外に術をもたなかつたのだが、突然に戦争への非協力が美德である時代を迎えてしまつたことで、そのころの底に暗

い虚ろを抱えさせられたのではなかつたか。そして、敗戦を境として、戦争と一体化せねば生きられない時代と、戦争を批判せねばならぬ時代との両方を生きながら、しかし、未だに彼ら戦争体験者が、批判ということばだけでは決して表現し得ない、体験への執着をもち続けているということが、まさに日本人にとつての戦争と戦後の意味を照らしているではないか。

戦争という状況の特殊性は、国家・軍隊組織・夥しい死者と、いふことの前に、この日本人的な、熱中の美学（戦闘への美德觀念）を基軸とするメカニズムにおいて考えられねばならない。吉田が体験というものに囚われねばならなかつたこと、執筆に当たつてそれを突き放して対象化し得なかつたことの根拠も、逆ればこの問題と、それを「強いられた」とする被害者意識の問題とに行きつく。加うるに、実際の戦争・軍隊生活の中には、個人をその内面から捕縛する、上官との服従関係の絶対性、戦闘（殺戮）それ自体への快感、極度に強要された滅私觀念、等々の倒錯した美意識が部分的にであれ介在したことも否定できないだろう。そして、戦争体験者の内部における体験といふものの実体は、それら総てであるところの戦争状況内意識を基盤にせざるを得なかつたといふところに、それがなぜそのようなかたちを持続したかについての決定的な根拠をもつ。戦争体験といふものの本当の痛ましさもここに起因する。

国家と戦争の構造を見ない、痛ましい、壮絶な吉田の記録は、確かに、かつての吉田少尉の意識として蓄積されたものであつて、そのような精一杯であることの美学を最底辺部に含んでいる。そして、これこそが問題であるが、そのような美学或いは

美徳観念は、殆んど総ての戦争体験者の中にあつたばかりでなく、敗戦によつても払拭されることなく、現在の私たちの中にもないとはいえないのだ。私たちは今日なお、あの戦争へと結局は雪崩れ込んだ日本人の体質——私たちがそこから解き放たれない非論理の悲惨を、あの戦争を契機としてさえ乗り越えてはいない。事実、果して私たちは、この作品世界が現出させる膨大な〈虚無〉への慄きを、〈ワレ戦エリ 戦エリ——濁リナキ回想〉などという精一杯である姿への肯定と混合して感じとることにおいて感動するのではないと断言できるだろうか。

ともあれ、確かに、この吉田の記録的作品は、彼の戦争状況とも戦後の持続と増幅とによつて構成されたものであり（少なくとも戦後的な虚構ではなく）、戦争状況内での姿——それゆえに、戦闘への陶醉、熱中の美学を相応に映し残しているという点で、私たちにとつて貴重な戦争作品といいうる。ただ、現在のこの作品から私たちが読みとるべきは、決して、〈ほとんど無謀に等しい作戦という判断の下でも、自分の義務に対する責任感と誇りがとらせたところの、美しい人間性の現われ〉（河上徹太郎『戦艦大和——跋文』）などではない。私たちにとつて重要なものは、むしろ、如何にしてこの日本人的な〈忠実さ〉〈美しさ〉自体を疑い、その限界を突き破っていくかということではないのか。そして、それはそのまま、文学の課題でもある筈なのだ。

（昭和四十七年度卒）